様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２１年　５月　１日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５９２３１７
研究課題名（和文）　看護教員のインストラクショナルデザイン力の開発に関する研究

研究課題名（英文）　A Study on the Development of Nursing Teachers' Skill in Instructional Design

研究代表者
森田　敏子（MORITA TOSHIKO）
熊本大学・医学部・教授
研究者番号：３０２４２７４６

研究成果の概要：
研究の目的は、看護教員あるいは臨床の実践現場で研修を企画する立場にある看護職員や研修の講師を務める看護師のインストラクショナルデザイン力を開発することによって教育力に関する資質を高め看護教育の向上に寄与することである。研究方法は、インストラクショナルデザインに関するワークショップを開催し、その前後でインストラクショナルデザインに関する認識調査を行い、さらに同意が得られた個人に半構造的面接を行って指導した。その結果、インストラクショナルデザインの基礎理論であるガニエの９教授事象及びARCS動機付けモデルを活用した改善成果があり、インストラクショナルデザイン力が高められることが示唆された。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	2,000,000	0	2,000,000
2007 年度	900,000	270,000	1,170,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	420,000	3,820,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学
キーワード：看護教員、インストラクショナルデザイン、ID、教育力、授業、シラバス、研修

１．研究開始当初の背景

我が国の人口の少子高齢化や生活スタイルの変化から人々の価値観の多様化が複相して健康思考が高まり、生活の質が追求されるとともに情報化社会の中でITを駆使する医療環境となり、移植医療や遺伝子治療など高度先端医療が推進され、今日の医療や看護を取り巻く状況は劇的に変貌を続けている。看護教育は社会の変化に応じて対応していく必然性があり、社会的、専門的な責務を果たしうる

有能な人材の育成が求められている。

平成10年の大学審議会の答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について－競争環境のなかで個性が輝く」では、大学教育ならびに授業における課題探求能力の育成を目指した教育研究の質向上が問題提起されている。文部科学省ならびに厚生労働省は、看護教育に関して「大学における看護実践能力の育成の充実に向けて」（平成14年）、「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会」（平成15年）、「新人看護職員の臨床実践能力の向上に関する検討会」（平成16年）、「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」（平成16年）などの報告書を次々に提出し、看護教育者が取り組む課題を提示するとともに、医療現場の看護職者の看護実践力を高める取り組みを推進している。

このような社会背景から、看護教育の現場では、看護学生の看護実践力を高める取り組みがなされているが、教育効果があがっているとは言い難い。これら報告書等によって教育内容や到達レベルが示されたからといって、学習者が学ぶ力を身につけられ、その結果、看護実践力が高まるとは言えないからである。これらの課題を解決するには、看護教員がどのように教えるのかが重要になり、看護教員は教える力があるのかという教員の教育力を問題にする必要がある。

そこで本研究では、今日の保健医療に関するニーズに応じた看護実践能力を高める看護専門職者の人材育成を具現化するために、看護教員の教育力としてインストラクショナルデザイン（ID）に着目することとした。インストラクショナルデザイン力とは、これまで看護教員が行ってきた授業設計や指導案作成の能力を超えて、全体的にみて授業の構成をデザインする力である。教育内容をどうプレゼンテーションしたら効果的か、どのように内容を構成したら目標に到達できるのか、どう質問したら学習者が学び、どう評価したら改善できるのかといった全体を構成し、全体をまとめてデザインする力が必要である。

本研究の取り組みは、看護教員の教育力を問い、教員の授業改善の取り組みによる教育方法の開発ならびに授業を魅力あるものに構成するためのインストラクショナルデザイン力を開発することであり、看護教育をより魅力あるものとし、看護教員の資質を向上するという信念に基づいている。また、看護教員の教育力を意識化し、授業改善へ主体的な取り組みを刺激し、魅力ある教員として授業が展開できることを目指すインストラクショナルデザイン（ID）に焦点を当てることに学術的な特色がある。看護教員が自らの教育力を、授業デザインつまり、インストラクショナルデザイン力の視点から自己評価し、インストラクショナルデザインについて学び、インストラクショナルデザインを授業に取り入れ授業を展開する力を開発することは、看護教員の教育能力を自覚的に開発することになり、看護教育にとって意義があると考えている。

２．研究の目的

本研究の目的は、看護教員あるいは臨床の実践現場で研修を企画する立場にある看護職員や研修の講師を務める看護師のインストラクショナルデザインに関する意識の実態を明らかにし、それら教育に携わる人々のインストラクショナルデザイン力を開発することによって教育力に関する資質を高め、看護教育の向上に寄与することを目的としている。

３．研究の方法

(1)対象：インストラクショナルデザイン・ワークショップに参加した看護教員あるい

は臨床の実践現場で研修を企画する立場にある看護職員や研修の講師を務める看護師を対象にする。

(2)方法：
①認識調査：ワークショップ前後にインストラクショナルデザイナーのスーパーバイズを受けて作成した自記式調査用紙を配布し、インストラクショナルデザインに関する認識について分析する。

調査項目はシラバスの認識、シラバスに対する気持ち６項目、良い授業や研修を行うために重要なこと、インストラクショナルデザインという言葉に対する気持ち７項目、インストラクショナルデザインに関する意識17項目、ワークショップ参加動機12項目、授業・研修で心がけていること（ガニエの９教授事象、ARCS動機付けモデル等）30項目、これまで受けた授業、研修で最も良いまたは最悪と思ったものとその理由等である。
②半構造的面接指導によるシラバス改善

(3)倫理的配慮とデータ収集
参加予定者に事前に研究の主旨と研究協力依頼書およびアンケート用紙を郵送し、回答の協力を求め、ワークショップ当日にも研究の主旨を説明し､再度研究への協力を求めた。その際､研究への参加は自由意志であること、倫理的に十分に配慮することを説明した。ワークショップ終了後にも、事後のアンケートへの回答を求め、回収箱に投函する方法でアンケート用紙を回収した。

(4)　ワークショップ概要
①講師、ワークショップ主催者
・北村士朗：ID 専門家・熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻
・森田敏子：熊本大学医学部保健学科
・タスクフォース：尾澤重知、市川尚、高橋暁子、橋本諭、井ノ上憲司
②展開：講義と演習内容はインストラクショナルデザイン（ID）の基礎理論（ADDIE モデル，ガニエの９教授事象，ARCS 動機づけモデル、認知的徒弟制度理論など）
・第１回実施日：平成 19 年３月 10 日
テーマ：看護教員・看護職のための理論をもとにした看護教育デザイン研修～インストラクショナル・デザインワークショップ
内容：基礎理論講義後、１グループ６人編成のグループにタスクフォースを配置し、講義→演習、講義→演習のスタイルで進行。課題についてワークシートを使って考え記述し、内容をグループ内で発表。発表内容にコメントシートを使って参加者が相互にコメント、アンケートに回答しながらワークが進行し、理解を深める方法で展開した。
・第２回実施日：平成20年２月23日
テーマ：理論をもとにした看護教育デザイン研修～インストラクショナル・デザインで研修・授業を改善！
内容：基礎理論講義後、１グループ４～６人のグループ編成、グループにはタスクフォースを配置せず、研究代表者が全体司会者を担う。有志がシラバスを提示して発表し、シラバス概要説明に対して、各自がコメントや疑問点、改善点などの意見を出し合い、シラバス改善のヒントを得る方法で展開した。

４．研究成果
(1)シラバスとインストラクショナルデザイン認識
事前調査では、シラバスを知っている21人（84%）、知らない４人（16%）であり、インストラクショナルデザインについては、全員がはじめて聞いたと回答し、事前に知っている人はいなかった。よってシラバスおよびインストラクショナルデザインに関する知識の普及が必要であることが示唆された。

(2)シラバス作成で重要なこと

事前27人（90.0%）、事後26人（86.7%）から回答を得た。

①教育内容：前（内容の理解、専門知識、内容の明確化、国家試験出題基準）、後（内容の理解、内容の精選、専門知識、一度に多くの内容を盛り込まない）

②目標：前（目標の明確化、科目目標の明確化）、後（教育目的、育てたい学生像、教育目標の明確化）

③構造化：前（内容の構造化、立案能力、計画性、効果の確認、カリキュラム構造、デザイン力）、後（目的・目標・評価・内容の整合性、構造化、構成力、学習の順序、全体を見通した計画、他教科との関連、コマ割バランス、構造化と系列化）

④講師：前（看護師経験、作文能力、技能、教材選択、単元のイメージづくり）、後（看護師経験、作文能力、専門技術、今必要なことを把握する能力、教えたい教師の意図、表現力、教材選び、見た目の魅力）

⑤教え方：前（話術、時間配分、具体案、指導順序の具体化、デモンストレーションと時間調整、手技の図案）、後（教育方法）

⑥学生提示：前（教育内容、方法、評価方法、参考文献、全体計画）、後（目的、目標、内容、評価、参考文献）

⑦評価：前（目標に照らした評価）、後（教育評価の明確化）

⑧理念：前（教育理念）、後（記述なし）

⑨学生理解：前（レディネス、学習者が必要としていること、学習者の立場に立つ、意見を聴取する）、後（対象者の準備状態、レディネス）

⑩動機付け：前（動機付け）、後（動機付けにつながる表現）

⑪インストラクショナルデザイン理論：前（記述なし）、後（インストラクショナルデザイン理論の活用、認知的徒弟制度、対象者の条件、ARCS動機付けモデル、出口と入り口、目標は一歩手前まで）

(3)良い授業・研修をするための認識

事前28人（93.3%）、事後26人（86.7%）から回答を得た。事前調査では178件がコード化され、「講師54件」「教育内容51件」「教育方法47件」「教育目標11件」「学習者９件」「学習環境３件」「評価３件」の７つがカテゴリーされた。事後調査では131件がコード化され、「教育方法36件」「教育内容と構造32件」「学習目標26件」「評価20件」「講師12件」「学習者３件」「その他２件」の７つがカテゴリーされた。ワークショップ前は、講師の話術に意義を見いだしており、授業をシステム的に構築する考えはなかった。ワークショップ後に方法、構造、目標をシステム的に思考することを認識していたことから、インストラクショナルデザインの基礎理論が生かされるという示唆を得た。

(4)ガニエの９教授事象

回答を得た22人（84.6%）からガニエの９教授事象は17件が抽出された。

・導入：新しい学習への準備を整える

①学習者の注意を喚起する　　０件
(Gain Attention)

②授業の目標を知らせる　　３件
(Inform Learners of the Objectives)

③前提条件を思い出させる　０件

・情報提示：新しいことに触れる
(Stimulate Recall of Prior Learning)

④新しい事項を提示する　　０件
(Present the Stimulus)

⑤学習の指針を与える　　２件
(Provide Learner Guidance)

・学習活動：自分のものにする

⑥練習の機会をつくる　　４件
(Elicit Performance)

⑦フィードバックを与える　４件
(Provide Feedback)
・まとめ：でき具合を確かめ忘れないように
⑧学習の成果を評価する　　２件
(Assess Performance)
⑨保持と転移を高める　　２件
(Enhance Retention and Transfer)

(5)ARCS動機づけ理論

回答を得た22人（84.6%）のARCS動機づけモデルの意見は以下の件数であった。

①注意（Attention）：
　面白そうだ　４件
②関連性（Relevance）：
　やりがいがありそうだ　　３件
③自信（Confidence）：
　やればできそうだ　　２件
④満足感（Satisfaction）：
　やってよかった　８件

(6)シラバスの改善例

①目標：前＜１．看護における安全の意義を理解し、安全を守るための看護師の役割について理解する。２．起こりやすい事故とその防止のための具体的方法が理解できる。＞が、後に、＜１．看護における安全の意義と安全を守るための看護師の役割について説明できる。２．起こりやすい事故とその防止のための具体方法が説明できる。＞と改善された。
②学習者の注意喚起：「病院は安全だろうか？と問題を提示する」が追加された。
③前提条件を思い出させる：「看護学概論で学んだナイチンゲールが生命力の消耗を最小にするように環境を整えるといった意義は何か？」と、「病気の場合、皮膚の機能は多かれ少なかれ低下している、病人の身体を不潔なまま放置したり、・・、健康をもたらす自然の過程を妨げて患者に害を加えることになる」「清潔な空気と水、周囲を取り巻く清潔な環境と雰囲気―これこそ「感染」に対する確かな安全装置である」が追加された。
③　情報提示：新しい事項（安全を守る使命感と観察力）、学習の指針（観察する眼はどこの何を見れば良いか、そのための知識、行うべき技術、チーム医療としての連携等）が追加された。

シラバスでは、目標の具体的表現、到達度と評価の関係の明確化、ガニエの９教授事象の取り込み、ARCS動機付け等が図られた。

(6)まとめ

本研究において、看護教員ならびに研修を企画する看護職がインストラクショナルデザインについて学び、インストラクショナルデザインの基礎理論を活用して授業や研修を企画・展開するならば、教育力を高める一助になることが示唆された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計　１　件）
①　森田敏子、松永保子、木子莉瑛、有松操、南家貴美代、岩本テルヨ、北村士朗：インストラクショナルデザイン力の開発に関する研究：―良い授業・研修をするための認識；ワークショップ前後の変化―、第39回日本看護学会論文集―看護教育、60-62、日本看護協会、2009.

〔学会発表〕（計　９　件）
① 松永保子：インストラクショナルデザイン力の開発に関する研究―IDワークショップ参加者のシラバスについての認識―、第 28 回日本看護科学学会、555、日本看護科学学会、2008.12.21
② 森田敏子：インストラクショナルデザイン力の開発に関する研究―ID理論の理解を高めるインストラクショナルデザイン・ワークショップの効果―、第 28 回日本看護科学学会、286、日本看護科学学会、2008.12.21
③ 松永保子：インストラクショナルデザイン力の開発に関する研究―ワークショッ

プでインストラクショナルデザインを学ぶ目的の検討―、日本応用心理学会第75回大会発表論文集論集、16、日本応用心理学会、2008.09.14

④ 森田敏子：看護教員のインストラクショナルデザイン力の開発に関する研究―良い授業・研修をするための；ワークショップ前後の変化、第39回日本看護学会―看護教育、37、日本看護協会、2008.08.21.

⑤ 松永保子：インストラクショナルデザイン力の開発に関する研究―ワークショップ参加者のIDへの認識―日本看護学教育学会、第18回学術集会講演集、266、日本看護学教育学会、2008.08.03.

⑥ 森田敏子：インストラクショナルデザイン力の開発に関する研究―最高と思う授業に含まれるガニエの９教授事象とARCS動機づけ理論―日本看護学教育学会、第18回学術集会講演集、266、日本看護学教育学会、2008.08.03.

⑦ 森田敏子：看護教員のインストラクショナルデザインの開発に関する研究―インストラクショナルデザイン・ワークショップ参加者のIDへの理解、日本応用心理学会第74回大会発表論文集論集、53、日本応用心理学会、2007.09.09.

⑧ 森田敏子：看護教員のインストラクショナルデザインの開発に関する研究―最高と思う授業に含まれるガニエの９教授事象とARCS動機づけ理論、日本応用心理学会第74回大会発表論文集論集、52、日本応用心理学会、2007.09.09.

⑨ 森田敏子：看護教員のインストラクショナルデザイン力の開発に関する研究―良い授業・研修をするために重要と認識していること、第38回日本看護学会―看護教育、91、日本看護協会、2007.08.09.

〔その他〕

① 冊子（研究報告書）：看護職員のインストラクショナルデザイン力の開発に関する研究、熊本大学医学部保健学科、2009. 3.

② 冊子（熊本大学公開講座からの学び）理論をもとにした看護教育・看護研修デザインセミナー2008、インストラクショナルデザインワークショップ、熊本大学医学部保健学科、2008、12.

６．研究組織

(1)研究代表者

森田　敏子（MORITA TOSHIKO）
熊本大学・医学部・教授
研究者番号：30242746

(2)研究分担者

早野　恵子（HAYANO KEIKO）
熊本大学・医学部附属病院・助教
研究者番号：70336238

(3)連携研究者

松永　保子（MATUNAGA YASUKO）
信州大学・医学部・教授
研究者番号：50269560

岩本　テルヨ（IWAMOTO TERUYO）
山口県立大学・看護栄養学部・教授
研究者番号：80285444

木原　信市（KIHARA SHINICHI）
熊本大学・医学部・教授
研究者番号：30128269

木子　莉瑛（KIGO RIE）
熊本大学・医学部・講師
研究者番号：40253710

有松　操（ARIMATSU MISAO）
熊本大学・医学部・助教
研究者番号：50289659

南家　貴美代（NANKE KIMIYO）
熊本大学・医学部・助手
研究者番号：80264315